

JAMCA ニュース

The Japan Automobile Maintenance Colleges Association

No. 4

1995年1月1日

発行 全国自動車整備専門学校協会

編集事務局 〒136 東京都江東区亀戸2-28-5

☎03-3685-6761 FAX03-3684-7420

非凡な技こそ大学に勝る

専門学校は日本発展への厚い支持母体

読売江東理工専門学校校長 松浦 悦之

昭和27年ごろ、東京大学教養学部(駒場)へ本郷から出張講師に指名された。微分方程式演習である。佐藤常三教授が講義したものの演習である。佐藤教授の講義の大体の進み具合やレベルは、学生のノートを見て判断し、演習問題を考えた。

大学の教務関係の教授からは“微分方程式を実際問題として取り扱うような演習をやりなさい”と命令されていた。実用的な微分方程式を考えるのは若い私には不可能だった。いろいろな形を集めて問題を作る。ところが、学生は数学の問題としての微分方程式を考えるだけで、実用的問題意識を持たせるのは並大抵のことではない。

なぜならば、自然の仕組みに微分方程式を適用すると全く複雑になって、解が出てこない。若い私にはそのあたりの見透しがあまい。

「仕事」か「職」か

ある時、解があるかないかの議論を数学的に追い求める演習を行っていた。突然、学生から「先生、1オクターブ高い。もう少し下げてください」。私は何のことやら分からずびっくりしたが、声が高いのだらうと思った。低い声は出ないと思いながらその時間が終わった。

終了後、私の近くに3、4人の学生が集まってきた。「1オクターブ高いか」と聞いたら、「講義のレベルです」とはっきり言われてガクッときた。戦後のゴタゴタ時代で、演習が終わると、さっそくヤキイモをかじる学生も見受けられた。



現代のように管理された教育課程がない時代で、学生は極めて高低差のある内容を聞いていただろうと思う。しかし、大学では日進月歩の内容を講義に組み込んで話をするから自ずと難解な内容も出てくる。

専門学校教育と大学教育の比較検討は修学年限の大きな差が第一である。大学は、4年で実社会に出る人、さらに高度の学習に進む者、など多くの分岐がある。しかし、専門学校では、実社会に自分の持つ資格で武装して飛び込んでいく人がほとんどである。

「資格社会」と呼ばれる現代、「仕事」を求めるのか「職」を求めるのか? 「仕事」とは一般的に労力を提供することを指すが、「職」とは職業、職種、職域と呼ばれ一定の技術領域が示される。4年制大学では、学部学科の一般的な基礎的知識と、その上に存在する応用知識を学ばせる。しかし、欧州各国では4年制大学に工学部はほとんど設置されていないのが現状である。“限られた学科にのみ学問がある”と考えられた時代の残像で、近代生産技術に遅

れをとった国があるのはそれである。

日本の現代の専門学校は、歴史は大変浅く、専門学校の設置は技術教育の必要そのもので形成された。従って、日本の近代技術の修得には極めて厚い支持母体となっている。日本の専門学校はだんだんと教科内容も整い、指導方針も確立され、学生の進路と職種もはっきりと分類されてきた。方向性を失った現代の政治と異なり、若者がしっかりと技術分野とその体系を学びとることが出来る。専門学校の教育は、何にも変えたい出発点となる。

着実に積み重ねを

冒頭に書いた大学での教育は、微分方程式の形や解法を訓練するが、実用的立場で考えるには、さらに高度の教育および研究の場が必要となってくる。その点では、大学は高度な概念の入門である。ここで失敗した卒業生は、何ものも残らないただの思弁家になる。

教育は自分の目指す目的に沿って着実に積み重ねを繰り返す作業である。結果的に高度とか何とか言うが、非凡な技こそ貴重な存在として輝くことは確かである。

■ CONTENTS ■

- 2面 OPINION
- 3面 北から南から
- 4・5面 特集・国家試験に向けて
- 6面 協会トピック
- 7面 各校の行事紹介
- 8面 私の教授法